



さらに大きく対話の場を

創刊100号迎える

<創刊号>

40年9月社内報第1号発刊。ガリ版の片面刷りで、紙名を「九火」とする。「創立早や10年を過ぎなお成長を続けている当社は、ここに社内報を発刊して、その成長発展の生きた記録の道標ともならんことを願うものであります」と古賀社長(当時)の創刊の言葉。

<2号>40年10月
片面刷りから両面刷りに。事業所だより、趣味(俳句、川柳、短歌、詩)など好評。

<9号>41年5月
ガリ版から活字印刷になり、体裁内容とも一新。題字「九火」は古賀社長(当時)の直筆。私も一言の登場、30代代表の山崎福二さんが、「勇気を持って職場環境の整備に努めていきたい」と抱負を述べる。慶弔欄も始まる。小島紘一さん、了戒義記さん、作本勝司さん、井口瞳さん、南州任さんのご結婚を伝えている。

<14号>41年10月
河野静雲先生に俳句会のご指導をおおぐ。湯下浄美さんの「噴水の穂に虹が咲くここローマ」が天句に。

<15号>41年11月
うちの父おさん、登場、今田馨さんの長女育美ちゃんのお父さんの絵と作文を掲載。

社内報100号のあゆみ

<17号>42年1月
新春特集として初めて4面に。

<21号>42年5月
うちのベビー登場、第1回は葉山半四郎さんの長男幸彦君。石橋正人常任相談役(当時)が手記「往時を偲び将来を想う」を寄せる。

<25号>42年9月
大岳地熱発電所運開、現地取材に行く、「疲れてはいるが各人の陽やけた顔には、完成させた喜びがうかがえる」と報告。

<29号>43年1月
新春座談会 海(高島)山(大岳)の幸を語るを企画、建設の終わった高島と大岳の責任者に話を聞く。

<33号>43年5月
紙名を「九火」から「九火新聞」に変更。退職者訪問、始まる。座談会 事業は人なり、でこれから期待される社員像と会社の未来像を語る。

<36号>43年8月
完成した大分の三佐寮をカメラ訪

問。安全応募作文「あのときこうしたら」を募集、第1回作品は飯田五男さん。

<40号>43年12月
読者参加コラム「読者のいす」登場、伊藤俊雄さんがトップバッター。「私も一言」は本号をもって終わる。

<41号>44年1月
ことしの九火に何を望む」と題して九電火力部長(当時)石橋周一氏を招き、古賀社長(当時)と対談。

<42号>44年2月
題字の横に社是を掲げる。各所の目標達成への努力を紹介する「目標に向かって」始まる、第1回は大村事業所。1面コラム「けんせつ」登場。

<49号>44年9月
社内報創刊4周年を記念し、各氏から感想、意見をいただく。

<53号>45年1月
菅原社長、就任のあいさつで、「企業の成長は、役員を含む全社員の間絶え間ない研さんと努力によらなけれ

ばならないと思います。マンネリ化をいましめ現状を認識し、将来の的確な見通しのもとに、新しい知識、新しい技術を身につけ、会社発展のために一致協力して邁進することが肝要であります」と語る。

<55号>45年3月
賃金体系をシリーズで解説。

<57号>45年5月
原子力発電技術への接近、登場原子力発電のしくみを解説。

<63号>45年11月
菅原社長、東欧視察雑考で「日本ほど自由で、人権が尊重され、生活物資が豊富で、暮しよくしかも美しい国が世界のどこにあるのか」と外から日本を見た感想。

<65号>46年1月
「九火新聞」の書体を変更。新相浦建設地点をゆくを企画、受注時点に今後の工事予定と現地の状況を取材。

<68号>46年4月
紙名を「NPCニュース」とする。

<73号>46年9月
当社過去3ヵ年の災害状況を探る。

<77号>47年1月
特集 九州に原子力時代、で、玄海発電所の工事状況と原子力発電のしくみを解説。

<78号>47年2月
厚生年金給付の種類と給付額をとりあげる。

<81号>47年7月
解説 勤労者財産形成促進法、で財産形成貯蓄を紹介。

<84号>47年10月
協力業者訪問、始まる、第1回は一木工業社長一木二拾四氏を訪ねる。

<88号>48年2月
完成した自由ヶ丘アパート(社宅)をカメラ訪問。

<90号>48年4月
48年度定期採用者の横顔を紹介。

<91号>48年5月
新入社員基礎技能教育(大牟田)の1日をカメラで追う。

<94号>48年8月
建設進む沖繩県石川に現地取材、「今後暑さはいよいよ本格的になり工事も最盛期を迎えるが、所長以下全員の意気どみも新たに、難関を乗りきることを期待したい」と結ぶ。

<99号>49年1月
玄海「展示館」を訪ねる。